父のノート

月　日　名前

発展（はってん）①

父のノート

父は無口な人だった。郵便局に勤めていて、朝早く家を出て、夕飯の時もほとんど話さない。陽太は、父が何を考えているのか、分からないと思っていた。

中学受験をやめると決めた秋、陽太は父に打ち明けられずにいた。三年間通ったじゅくの費用を思うと、言い出せなかったのである。母を通して聞いたはずの父は、何も言わなかった。そのちんもくが、陽太にはつらかった。おこられるより、ずっとつらかった。

十二月のある日曜日、父の本だなで辞書を探していた陽太は、古いノートを見つけた。何気なく開くと、見慣れた父の細かい字で、日付と短い文が並んでいた。

「四月十日。陽太、じゅくの初日。きんちょうした顔で出ていく。」

「七月二日。算数の点が上がったと喜ぶ。夕飯をおかわりした。」

ページをめくる手が止まらなかった。そして、最後のページに、先月の日付があった。

「十一月八日。受験をやめると聞く。自分で考えて決めたのだろう。三年間、よくがんばった。何も言わずに見守ろう。」

陽太はノートを閉じ、しばらくその場に立っていた。窓の外は、いつの間にか暗くなっていた。

その夜の夕飯で、陽太は父の茶わんにご飯をよそった。

「ありがとう。」

父はそれだけ言って、いつものように静かにはしを動かした。陽太には、その静けさが、前とは少しちがって感じられた。

1 父の仕事場はどこですか。

2 陽太が父のちんもくをつらいと感じたのは、なぜですか。

ア　父の考えが分からず、おこられるより苦しかったから。

イ　父が大きな声でしかったから。

ウ　父が家にいなかったから。

3 ノートの最後のページから、父のどのような思いが分かりますか。

4 「前とは少しちがって感じられた」のは、なぜですか。

ぜんぶ　できたら　ほしに　いろを　ぬろう ☆ ☆ ☆

© きりんドリル kirindrill.com